

書評・紹介

宮崎道生著『青森県の歴史と文化』

工 藤 祐 董

著書宮崎道生博士はさきに『青森県の歴史』（山川出版社）を刊行され、最も権威ある青森県通史との定評を確立されたが、本書はその姉妹編とも言うべきものである。前者が総論とすれば後者は各論あるいは特論にあたるものである。『青森県の歴史』を読んだ際にも感じたことであるが、膨大な史料・著書・論文を精読・吟味・考証され、一字一句もゆるがせにしない博士の学究的な態度に敬服せざるをえない。

本書はⅠ総説、Ⅱ中世・近世、Ⅲ近代の三部に分れているが、その大部分は博士の折々の講演、学術誌・新聞などへの寄稿、編書・著書的一部分等をこのたび一書にまとめられたものであり、全体と

して見ると「青森県の歴史と文化」の表題にまことにふさわしい内容と思われる。高度の学術的論文をはじめ内容は多彩であり、青森県の歴史に対する博士の深い御造詣をふまえた青森県文化論でもある。

青森県民や地元の地方史研究者がともすれば陥りがちな後進地域のイメージに伴う被害者史観、敗北史観を本書の随所で博士は戒しめ、創造史観に立つての展望が必要であるとされる。後進県と言うのは明治以後の現象である。それは明治以後国際環境に対処するために富国強兵・殖産興業の政策を急速に推進した際の能率主義・重点主義、風土的経済的悪条件等が主な原因であり、日本の近代化が中央本位・藩閥本位・特惠資本本位であったとするのは半ばあてはまるかも知れないが、断定してしまう訳にはいかないとされる。客観的な公正な見解として注目される。明治以前幕藩期には、諸藩の文化水準はほぼ平均化されていたとみなしてよいとされる博士の考え方には、私の調べている法制史の一面から見ても同感を禁じえない。

Ⅰ総説の「青森県の風土と県民性」「南部と津軽」は青森県に在住される二十六年余りにわたった博士の青森県の歴史と風土、県民に対する深い理解と青森県に対する愛着が伺われる内容であり、青森県は後進的側面と同時に開明度のたかい側面も認められるとして「神秘と反骨の青森県」と表現され、県民性は自然条件・人為的条件によって変りうるものとして、長所をのびし短所を改める可能性を期待されている。

Ⅱ中世・近世においては、地域社会の実体に即した科学研究が

地方出身者によってなされるのが効果的であり、青森県の中世史を解明するために安東氏ばかりでなく、南部氏・北畠氏についての研究等が必要であるとされている。

「中世史上の安東氏」は、青森県にとどまらず日本の中世史を解明するために必須の課題である安東氏についての問題点を適切に指摘されたものであり、『青森県の歴史』の安東氏についての博士の記述と併せ読むことによって一層明瞭となる。「津軽のキリシタン」は博士が二十年近く構想されたもので、従来の諸説を精密に検証し所論を述べられたもので、分析・検証の緻密、正確さは比類がない。

「津軽藩宝暦改革の思想的背景」では、改革の中心人物乳井貢を取りあげている。貢の学問は山鹿素行・荻生徂徠・太宰春台の影響から実学であり、治国平天下の学であり、政治思想から觀察すると(1)君民一体、(2)生活権の平等、(3)職能尊重である。また経済思想の基本的なものと認められるのは(1)農本、(2)商業貿易藩営、(3)安定経済であるとされ、貢が他藩資本の利用を考えた事にマーカンテリズムの萌芽を認め、経世家として二流を下るものではないといっている。諸藩の藩政改革の立役者同様挫折し、毀誉褒貶相伴う乳井貢について、新井白石研究の第一人者である博士の評価は傾聴すべきものである。

III 近代では、「百年をむかえた青森県」「青森県と近代化」等について所見を述べられているほか、「北奥精神史の一齣」として棟方志功試論を展開されている。博士は「歴史的に考察しなくては人物観はきまらない」とされ、北奥地域人の精神的特性として、叛骨、

エネルギーの鬱屈、シャーマニズム的傾向、ディオニソス的性格をあげ、さらに風土的背景、棟方志功の育った環境や彼に影響を及ぼした人物、時代的背景等を詳細に論じて、彼の板画の背後にひそむものを余す所なく解明されているのは実に興味深く肯綮に価する。最後の「弘前大学二十年史(抄)」は三百年の文化的伝統を持つ弘前市に大学が設置されたのはまことに自然であり不思議なめぐり合わせであると述べられているが、この一篇は同時に戦後の教育改革の実態、新制大学の発足と発展の苦悩を浮きぼりにしたものであり、今日総合大学としての偉容を備えるに至った弘大の創立と発展の労苦を偲ばせるものである。

本書において青森県の歴史と文化についての幾多の示唆とこれらの課題が示されているが、今後とも特に青森県の地方史研究について博士の御教示を期待してやまない。

(B6判、本文三〇〇頁、津軽書房刊、定価一八〇〇円)